研究会「LHCでの余剰次元研究」 東京大学,2009年9月7日



寺師 弘二 ICEPP東京大学

アウトライン

Universal Extra Dimensions

▶モデルと発見能力

Kaluza-Kleinグラビトン

▶ 大きな余剰次元: Mono-jet、Di-jet
 ▶ 歪曲した余剰次元: 共鳴状態





Universal Extra Dimensions

Minimal UED モデル:余剰次元を1次元だけ持つ高次元模型

3つのパラメータで記述される。

- ▶ R⁻¹:コンパクト化スケール
- ▶ Λ:カットオフスケール
- ▶ m_H:ヒッグス質量

<u>LHCでの生成</u> g⁽¹⁾g⁽¹⁾,g⁽¹⁾q⁽¹⁾,q⁽¹⁾す⁽¹⁾が主にな る。

崩壞過程

レプトンを伴う崩壊が多い。

例) $g^{(1)} \rightarrow l + jj + E_T^{miss}$ $ll + jj + E_T^{miss}$

1/2/4-レプトン + ジェット + E^{miss} を持つ信号



Universal Extra Dimensions

KK粒子の質量差は**∧R**(量子補正)でコントロールされる。

- ► $\Lambda R = 20 \rightarrow \Delta M/M \approx 20 \%$
- ► $\Lambda R = 2 \rightarrow \Delta M/M \approx 5\%$

縮退度が上がるにつれ、KK 粒子崩壊からのレプトン・ ジェットはよりソフトにな る。

- pr ~ 10GeV程度までのレプト ン再構成能力とfakeの評価が 重要。
- トリガーも大切。
 - ▶ シングルレプトン
 - レプトン+ET^{miss}
 - ジェット+ET^{miss}



UEDの探索:1-レプトン/2-レプトン



Pythia UED (6.4.19)

- コンパクト化スケール **1/R** → 1/R = 400GeV-1TeV (50-100 GeV bin)
- 量子補正 **AR** → 各質量につき、AR = 2-5000(**ΔM/M = 5~50%**)

バックグラウンド

- QCD (PYTHIA)
- W/Z+jets (ALPGEN)
- tt(MC@NLO) → 最も主要なバックグラウンド

<u> 1 レプトン解析</u>

① #Leptons = 1 ($P_T^{Lepton} > 10 \text{ GeV}$)

② #Jets ≥ 3 (P_T^{Jet} >30 GeV)

③ Jet1 P⊤ >100 GeV

④ E^{Tmiss} >100 GeV

⑤ M⊤ >100 GeV

<u> 2レプトン解析</u>

1) #Leptons = 2 ($P_T^{Lepton} > 10 \text{ GeV}$)

- ② Same sign leptons
- ③ #Jets \geq 2 (P_T^{Jet} >50 GeV)

④ E^{miss} >100 GeV

UEDの探索:1-レプトン/2-レプトン







2009/10年のデータから期待されるパフォーマンス







Jie Chen (Florida State Univ.) SUSY09

Full Simulation Study

- MUED signal:
 - Generated by CompHEP and KK particles are decayed by UEDDECAY (enabling only 4µ,4e and 2e2µ decay channels)
 - Fix m_{higgs} = 120 GeV, ΛR = 20, scan R⁻¹ = 300, 500, 700, 900 GeV, as allowed MUED parameter space
 - R⁻¹ < ~ 1050 GeV from dark matter constraints.
 - R⁻¹ > ~ 300 GeV from EW precision measurement.
 - σ = 2, 0.23, 0.05 and 0.01 pb respectively.
- Main background:
 - ZZ \rightarrow 4 leptons (Pythia) $\sigma = 0.1 \text{ pb}$
 - ttbar+n jets and bbbb → 4 leptons (Alpgen) σ = 1.2 pb
 - Zbbar → 4 leptons (Pythia) σ = 0.7 pb
- Background rejection is our main focus in this analysis

UEDの探索: 4-レプトン



Trigger & Event Selection

- Trigger: single and di-µ/e
- Offline lepton selection:
 - Electrons: p_T>7 GeV, lηl <2.5, 0.9<E/ P< 1.5, and E_{Hcal} / E_{Ecal} < 0.1
 - Muons: p_T >5 GeV and $l\eta l$ <2.4
 - At least 4 isolated leptons and 2 pairs of OSSF
 - Isolation: Sum P_T of charged tracks within a R=0.3 cone around muon/e is less than 3 GeV
- B tag veto: reject if a event has ≥1 tagged b-jet



UEDの探索: 4-レプトン



For ZZ:

MUED leptons are SOFT. lepton p (1st, 2nd, 3rd, 4th) < (70, 60, 40, 30) GeV

For Zbb & ZZ:

MET > 60 GeV can be used for further background rejection.

After MET cut, the Zbb & ZZ backgrounds are already small compared to UED signals for R⁻¹=300,500, but still large for larger R⁻¹ signals -> Z veto.



- Combinatorial uncertainty for e+e-e+e- and µ+µ-µ+µ- channels
 - Removed by subtracting same sign lepton pairs.
- End-point transition: characteristic of decay of heavy particle
- Z veto: event is rejected if it has one or more OSSF lepton pair with Minv < 5 or Minv > 80 GeV

UEDの探索: 4-レプトン





- MUED can be discovered at the CMS with ~ 30 fb⁻¹ data for the allowed theoretical parameter space (300 < R⁻¹ < 1050 GeV)
- For R⁻¹ < 600 GeV signals, μ⁺μ⁻μ⁺μ⁻ and e⁺e⁻μ⁺μ⁻ channels can have a 5σ discovery with less than 1fb⁻¹ of data.

UEDの探索:Gravity-Mediated

- ▶ 全てのSM粒子が存在する4+δ次元のブレーン(1/R~TeV)が、4+N次元の大きな空間(1/R~eV)に埋め込まれているシナリオ。
- ▶ 4+N次元空間にはグラビトンのみが伝搬できる。
- ▶ KKフェルミオン・KKボソンの崩壊様式は、質量縮退度とGravity-Mediatedな 崩壊の崩壊幅に依存する。



UEDの探索:2フォトン+E^{miss}



 $\delta = 1$ (Minimal UED), N = 6, $\Lambda R = 20$, $M_D = 5$ TeV



UEDの探索: 2ジェット + E^{-miss}



▶ N=2の場合、KKクォーク・KKグルーオンはグラビトン+ゼロモードへ崩壊する。 → 2ジェット+ET^{miss}を特徴とする信号を作る。



1000

1500

2000

2500

M_{KK} (GeV)

UEDの探索: 2ジェット + ET^{miss} バックグラウンド $Z(\rightarrow \nu \nu)$ + jets $W(\rightarrow | \nu)$ + jets (lepton missed) イベント選別 No isolated leptons $p_{T}^{Jet1} > 250 \text{ GeV}$ $p_{T}^{Jet2} > 150 \text{ GeV}$

Δφ(jet1, jet2) < 2.6

100 fb⁻¹で~2.7 TeVまで発見可能。

▶ E^{Tmiss} > 775 GeV

UED+LED (M_{KK} =1.3 TeV)		バックグラウンド		
Efficiency	事象数(I00 fb ⁻ [」])	Efficiency	事象数(I00 fb ^{-I})	
14%	28000	0.07%	1800	
→ 質量I.3 T	eVのKK粒子の発見	」(10事象、5	σ) は~35 pb ⁻¹ で可能	影。

LEDでのKKグラビトン

大きな余剰次元モデル(Arkani-Hamed, Dimopoulos, Dvali)

- ▶ n次元のコンパクト化されたフラットな余剰次元(サイズR)。
- ▶ 全てのSM粒子は(3+1)次元ブレーンに束縛 →グラビトンはバルクに飛ぶ。

$M_{\text{Pl}^2} = V_n \ M_D^{n+2}$

真のPlanckスケール M_D ~ TeV \rightarrow 余剰n次元空間の"大きな"体積 V_n = (2 π R)ⁿ によって M_{Pl} ~ 10¹⁸ GeV が薄められた結果。

n=1:R~10⁸ kmとなり除外
 n=2:R~100µm (Eöt-Wash実験の範囲: M_D>3.2 TeV)
 n≥3:加速器実験で探索可能
 M速器実験での信号:
 KKグラビトンの実生成
 SM粒子間の仮想KKグラビトン交換
 全てのKKグラビトンタワーからの寄与の足し合わせ。



LED (δ=2)		バックグラウンド					
M _D =2TeV	M _D =6TeV	$Z \rightarrow \nu \nu$	$W \rightarrow e \nu$	$W \rightarrow \mu \nu$	$W \rightarrow \tau \nu$	tt	QCD
262	4.9	25.7	2.0	2.0	5.5	0.5	<0.6

バックグラウンドの評価

Z→vv+jetsバックグラウンドをデータを元に評価する。

 $W \rightarrow \mu \nu + jets$ コントロールサンプル

▶ イベント選別を適用(Isolated Track Vetoを除く)

- ▶ W→ $\tau \nu$: N(W→ $\mu \nu$)×Br($\tau \rightarrow \mu \nu \nu$)として評価
- ▶ tt:MCで評価





 $Z \rightarrow \mu \mu + jets$ を使うのは 統計的に厳しい、、、。

2ジェット解析



高prジェットあるいは大きな2ジェット質量を持つ事象の超過を探す。

- ▶ クォークcompositeness、micro black-hole(→2ジェット)探索にも有効。
- ▶ 実験としては難しい、、、。 (→次ページ)

2ジェット解析:QCDの精密測定

高いpr領域での実験・理論の不定性を正確に評価する必要がある。







- ▶ p⊤^{Jet}=1.0 TeVで+40/-35%程度。
- ▶ 最も大きな不定性。

- ▶ M_{jj} =3 TeVで+15/-12%程度。
- ▶ Eigenvector 6 (低いmass) and 11 (高いmass)からの不定性が支配的。

2ジェット解析:共鳴状態の探索



RSでのKKグラビトン

歪曲した余剰次元モデル(Randall, Sundrum)

▶ 2つのブレーン(PlanckブレーンとTeVブレーン)に挟まれた余剰次元。

▶ non-factorizableなバルクの幾何 $d_s^2 = e^{-2k|y|}\eta_{\mu\nu}dx^{\mu}dx^{\nu} - dy^2$ (k=バルクの曲率)。 ▶ PlanckスケールからTeVスケールへ、歪曲因子 $e^{-kr_c\pi}$ (krc ≈ 11) だけスケールされる。



RS KKグラビトン \rightarrow ee



主なバックグラウンド:

SM Drell-Yan過程

系統誤差:

Drell-Yan生成の不定性(理論)

- ▶ 9% at Mee=1TeV
- ▶ 14% at M_{ee}=3TeV cf) 実験による誤差 < ~5%



KKグラビトン・ KKグルーオンの探索

KKグラビトン→ee/γγ

→ (もし存在すれば)発見可能性は高い。

KK生成であることの証拠?

- ➡tt/WW/bbなどへの**崩壊分岐比**を 測定する。
- ➡崩壊生成物の同定が必要!



Bulk RS

- ▶ 全てのSM粒子がバルクに飛ぶ。
- ▶ KKグルーオン、トップクォーク(yt~1) ともにTeVブレーン近傍に局所化する。

→ KK g⁽¹⁾→ttが支配的(Br~93%)



高いpтのトップジェットを生成。 **へ**

- ▶ サブジェット構造
- ▶ ジェットの質量
- ▶ ジェット内のレプトンの存在 等を使ってトップをIDする。
- → 磯部さんのトーク

KKグラビトンへの応用:G* → WW



WW Candidate Mass (GeV)

まとめ

UED、LED、RSの典型的な信号に対しては、LHCでの 発見能力はかなり高い。

- ▶ ただし、よく理解された検出器・データが前提。
- ▶ 2ジェット解析は難しい解析の一つ。

これからやるべきこと(実験)

I) √s=10TeV、ルミノシティー100-200 pb⁻¹で再評価する。

- ▶ 14TeVの解析手法でOKか?
- ▶ 新たな問題点は?
- ▶ ジェット・レプトン・ET^{Miss}の再構成・較正パフォーマンス

2) data-drivenバックグラウンドの方法・評価の確立。
 3) √s=7 TeV、50-100 pb⁻¹ではどうか?

バックアップ

高いprのレプトン

- データを用いたレプトン同定効率 の決定
- →通常"タグ&プローブ"と呼ばれる方法が使われる。
- ▶ タイトIDカット on tagレプトン
 ▶ 効率 vs probeレプトン (Zボソン のピークで)
- ▶ 統計の限界 at pr^{Lepton} ~100 GeV
- pTLepton ~ 300-500GeVまで伸ばせられないか?
- ▶ MCとの比較・スケール調整 →もっと高いpr領域へMCで外挿?

Electronの場合 (MCの結果)

Eτ	280-560 GeV		560-1120 GeV		
	Efficiency	Jet Rejection	Efficiency	Jet Rejection	
Loose ID	90%	620	92%	550	
Medium ID	85%	2300	87%	1900	





ジェットの軟正



高いprのジェット

高pтジェットとバランス

するReferenceが必要

→ <u>マルチジェット</u>



主なずれの理由 (pr^{Jet1}<300 GeV)

- ▶ 不完全なH1軟正因子
- ▶ ソフトなグルーオン放射
- → 反跳システムのprを過小評価

- ▶ 反跳システム内のジェットは軟正されている必要がある。
- ▶ Jet 1は反跳システム全体とバランスする ため、以下を考慮する必要がある。
 - ソフトなグルーオン放射
 - underlyingイベント
 - out-of-coneエネルギー





2レプトン:共鳴状態

バックグラウンド (Electronチャンネル)

- ▶ Drell-Yan過程
- ▶ フェイクBG
 - ジェット: QCD, W/Z+jets
 - フォトン: W/Z+photon, di-photon
 - 両方: photon+jet

標準Electronカットのジェット(フォトン) 除去因子 **R=4x10³(10)** をバックグラウ ンドサンプルに適用。

- ▶ Drell-Yan BGが支配的
- ▶ 2ジェット BGはDYの約30%
- → どこまで信頼できるか?



34

- Electron ID/Acceptance



2ジェット:一般的な共鳴状態

